

新しい治療

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

酷暑の繰り返しが収束し暦が秋になった途端、我が国は経験のしたことのない大きな台風や北海道地震などの天災に見舞われた。偶然重なった大災害の被害者の方々に心よりお見舞いを申し上げます。

それにしても災害列島とはいえ、最近の地震、台風などの多くの天災に対しては、世界的状況も含めて、我々の住む地球に大きな変動が起きつつあるのではないかとの危惧を抱かざるを得ない。

そのような状況下、極めて明るいニュースが到着した。ノーベル財団が10月1日に、京都大学の本庶佑特別教授に2018年のノーベル医学生理学賞を授与する旨を発表した。評価されたのは、抗がん剤、外科手術、放射線治療の3種類だった既存のがん治療に、ヒトのカラダに備わる免疫の仕組みを利用してがんを叩くという、新しい治療法の道筋をつけたことである。

その仕組みを応用した治療薬の第1号は、関西を地盤とする中堅企業・小野薬品工業(株)がアメリカの製薬大手、ブリストル・マイヤーズスクイブと共同開発し、2014年に世界に先駆けて日本で発売した「オプジーボ」だ。

この薬は当初、皮膚がんの薬として発売されたが、その後、肺や胃など7種類のがんの治療にも効果があることがわかり、すでに60カ国以上で承認されている。

ただし、こうした新しいタイプの薬は、従来と異なり薬価が桁違いに高く、医療保険制度の存続を脅かしている。

実際に2015年末になって、オプジーボの保険適用範囲が肺がんにも広がった際には、「患者5万人が使うと年1兆7500億円かかる」との試算が明らかになり、厚生労働省は特別で、定期改定を待たずに2017年に薬価を半額に引き下げる措置をとったことでも大きな話題となった。

限りある医療資源を考えれば、確かに世界一の医療保険制度維持を圧迫することとなれば大問題ではあるが、このような画期的な治療法が日本人研究者の知恵で発掘され、日本の製薬会社から世界中に発信されたという事実には、医療人としては理屈抜きに誇らしく嬉しい気持ちでいたい。

そこで残念なことにオプジーボは、自身が心血を注いでいる甲状腺がんの治療には適応が認められていないが、我々の専門領域でも既に、分子標的薬

治療という画期的な新薬「レンビマ」が、日本企業であるエーザイ(株)から発売され、既存の治療法で対抗できなかった病状と戦えるようになってきた。

科学の世界に限らず、新しい手段、方法の導入には周到な議論と安全性が求められるわけだが、ヒトの命が救われる医学進歩に興奮をしている。

Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してパセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。東京女子医大、筑波大大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。伊藤病院<http://www.ito-hospital.jp/>名古屋甲状腺診療所(名古屋分院) <http://www.kojin-kai.jp/nagoya/>さっぽろ甲状腺診療所(札幌分院) <http://www.kojin-kai.jp/sapporo/>

